

加藤医院 開院100周年記念

連携に感謝



加藤醫院 開院百周年記念式典

2022年10月2日(日)
～連携に感謝～



「連携に感謝」

加藤一晴 加藤医院 院長

加藤醫院開院100周年記念イベント 「答えはそよ風(微風)の中にあつた!!」

「本日は加藤醫院百周年記念イベントにご参加いただきありがとうございます。ありがとうございました……」。

イベントの終わりの挨拶である。頭を下げたが、眼を閉じていても来場者から、満足した雰囲気伝わってきた。万雷の拍手は、深い共感を物語っていた。

コロナ禍での「百周年記念式典」強行開催は、ある種のリスクが付きまとう。まして、個人医療機関の主催であり、式典実施は諸刃の剣だった。万全を期すために慎重に下準備を続けてきた。

はじめに

大正11年開院の加藤醫院は今年で

正行先生（静岡県立総合病院地域医療支援監）⑦矢野邦夫先生（浜松医療センター感染症管理特別顧問）⑧石井廣重先生（石井第一産科婦人科クリニック院長）などの錚々たる来賓の方々が列席する。会場の感染対策は万全を期して、コロナ禍の最良・最善・最高の感染対策を立て、宴会場のモデルケースを目論んだ。（別掲載参照）。

開催日は2022年10月2日、会



ソプラノ歌手・山本愛子さんの美声が会場に響きわたった（アトラクションの場面）。

百周年余を迎える。その間、大正、昭和、平成、令和と移り変わり、疾患形態も感染症主体から、生活習慣病にシフトしている。医療としては祖父（加藤 勇）44年継統、父（加藤 敬）34年継統し、現院長の一晴は22年継統に過ぎないが、喫煙対策を通じ健康寿命の延伸には少しばかり寄与していると自負している。

浜松市は政令指定都市中、健康寿命が3期連続トップと言われているが、社会環境禁煙化に心血を注いだことも無関係ではあるまい。開院百周年記念と地域を纏めた喫煙対策の成果披露を主眼に、開催決定した。いっぽうで、亡父が37年前に息子（一晴）が医師になったことで、近隣

場はザ・浜名湖2F、ロイヤルホール。来場者100名に対し、直径2mのテーブル25個で対応し、壇上に掲げられた横断幕（5m×0.9m）に掲示された「連携に感謝」が誇らしい。

既に会場内に設置した4つの大型ファンが、緩やかな気流を漂わせている。アトラクションとして、ピアノ演奏者・山本絵里子さんも控室



会場の後方に設置した大型ファン2機

住人を招いてお披露目の会を開いてくれたことも頭の片隅にあった。

第7波^{さなか}最中の感染対策

今回の式典には、①鈴木康友市長夫人、②尾崎治夫先生（東京都医師会長）③城内 実氏（衆議院議員）④自見はな子氏（参議院議員）、⑤稲葉大輔氏（浜松市議会議員）⑥加治

で待機している。旧知である林望名誉顧問（浜松市やらまいか大使）作詞の浜松市歌が流れる中、司会者・原田靖子さんにより開会宣言が告げられた。

主催者挨拶

テーマを「連携に感謝」とした理由を伝えた。初代院長・2代目院長の頃と違い、現在は高血圧・糖尿病・脂質異常症・がんなどの生活習慣病が主体になっている。それには予防が重要であり、がん、その他の予防には、タバコ対策が重要である。

それは、まさしく3代目院長のライフワークだ。国策で販売されており、関係省庁の影響からトップダウンが効きにくい領域である。こつこつと地域住民に喫煙の有害性・受動喫煙の健康被害を伝えてきた。

これまで多くの医療機関、浜松市政、教育委員会、建設会社、杏林堂薬局、タクシー協会、医療機械関連そして世論時報社など、大勢の支援があつての成果であり、これが今回のテーマ「連携に感謝」である。

このように揺るぎなき世論形成を背後に、「タバコを売っていても、買う人が少ない街」へと進化することができた。当然、住民喫煙率も下がり、健康寿命の延伸に繋がった。このseamlessな市民活動は、加藤醫院開院百周年の集大成に華を添えることができた。

鏡開き

壇上に2つの樽が用意されていた。登壇者8名が杵を下ろして蓋を割ったが、中には日本酒でなく紅白の餅が入っていた。会場からどよめきが上がったが、司会者からは、「鏡開きならぬ鏡餅でした」のアナウンスがあった。

乾杯の挨拶・石井第一産科婦人科クリニック院長のあと乾杯し、壇上で写真撮影が行われた。

来賓挨拶

鈴木康知市長代理
知寿夫人
浜松市政を4期にわたり担当して



おり、健康政策が揺るぎないものであることを伝えていただいた。

尾崎治夫 東京都医師会長



東京都医師会長として、浜松市の喫煙対策を評価され来賓された。コロナ禍の現在、一刻も早く感染の終焉を願っていた。前回の東京オリンピック喫煙対策では、全国からの応援があり、特に浜松からの情報提供も大きかった。

城内実 衆議院議員



幼少期から喘息気味で苦しい思いをしていたが、原因はよく解らなかつた。それに対しドイツでの滞在期間は、さほど苦しさは感じなかったが、それは受動喫煙の影響であると理解できた。国会内の喫煙対策はようやく始まったばかりなので、声を上げ続けたい。

自見はな子 参議院議員

健康政策面において、タバコ問題はまだまだ遅れていると言わざるを得ない。

「これまでの加藤医院、これからの加藤医院」

主催者 加藤一晴

生活習慣病が管理されつつあるが、まだまだ個別には不十分な点が多い。やはり地域住民への啓発が必要である。これまでも関係各位との連携を重視してきたが、これからは諸団体との関係性を深めることこそが必要である。

これまで世話になった関係各位を明記する。

- 加治正行先生 (静岡県立総合病院地域医療支援監)
- 蓬台浩明氏 (株式会社都田建設代表取締役)
- 青田英行氏 (株式会社 杏林堂薬局取締役副会長)
- 久野富雄氏 (浜松交通株式会社代表取締役)



- 宮崎 正先生 (浜松市教育長)
 - 蒲重光先生 (学校法人黄柳野学園 黄柳野高等学校 理事)
 - 坂田英夫氏 (前雄踏地区連合自治会長)
 - 足立典正画伯 (洋画家)
 - 山下瑠美子さん (書道家)
 - 里中恵介氏 (Luna & Stella 代表)
- と、大勢の方からの有形無形の協力があつた。
- 詳細は割愛するが、喫煙問題の肝心の部分を知らずに大人になっていくケースが多い。上記の如く、社会的にありとあらゆる領域に直接出向き、真実を

得ない。妊婦喫煙やこどものへの受動喫煙などの健康被害は後を絶たない。このたび、こども家庭庁が出来たので、取り組んでいきたい。

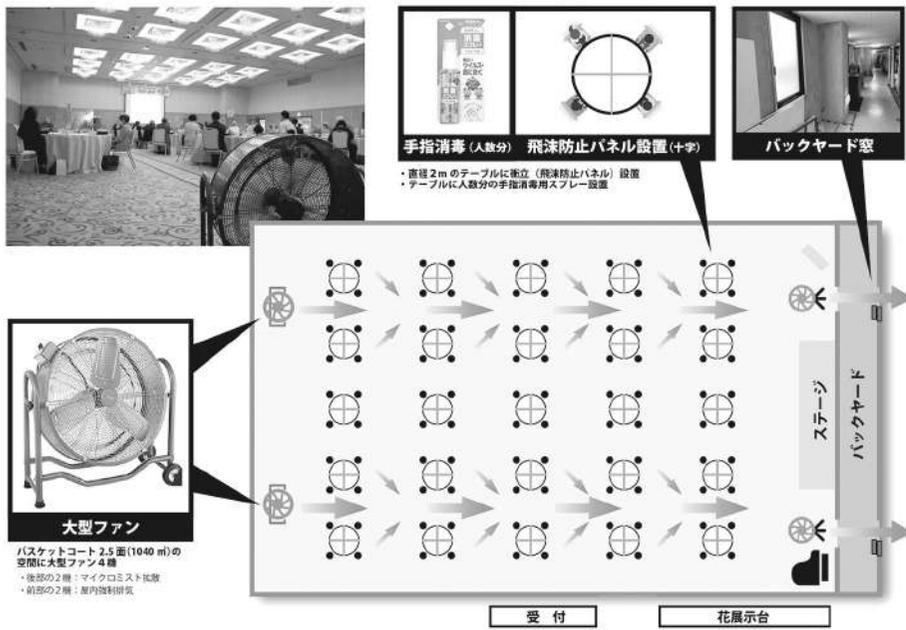


アトラクション

ソプラノ歌手・山本愛子さんが壇上から美声を披露した。曲名は「私の大好きなお父さん」、2「上を向いて歩こう」、3「乾杯の歌」で、ステージ上からの圧倒的な音量に聴衆は圧倒された。

ミニ講座

講師・矢野邦夫先生(浜松医療センター 感染症管理特別顧問)
「今、感染症を考える」と称した15分間のミニ講座が開催された。現状の感染状況を、戦国武将に準えた講演内容に、会場は深く納得した。コロナ禍も3年目を迎え、地域住民の感染対策意識も高揚してきた。



伝えてきた。これまでの20年以上の足跡は、見える形になりつつあるが、大勢の支援があつてのもので、まさに「連携に感謝」と考えている。人々は、波紋は起きるものではなく、起こすものである。ことに薄々感じ始めたのだろうか。一般的に民主主義の原則は、多数決の原理と少数派の権利と云われるが、声を上げることこそが重要なのである。

いっぽうで県内のタバコ問題を俯瞰的に眺めると、糖尿病罹患にも同じ傾向がある。県内でも自治体によりかなりの差異がある。つまり、糖尿病連携に関して県民の意識高揚はまだまだである。引き続き顔の見える関係を構築し、十分なコミュニケーションを目指したい。

各々のテーブル席で挨拶

関係各位からのメッセージの間、家内とともに25テーブルすべてに挨拶周りをした。各テーブルの移動中にも、背後の大型ファンは回転しており、身体には僅かな風を感じた。更に前方の2つのファンが屋外排気

し続けていた。屋内大気は緩やかに前方に移動しているのが分かった。

大袈裟おおげさに言えば、壁に囲まれた屋内会場ウチノカイジョウの、屋外に設置された大規模テラス席化テラスセキカ作戦は完ぺきではないが成功と言えるのではないだろうか。その辺りの雰囲気を知りか、各テーブルの参加者は満足げな表情だった。

終わりの挨拶

稲葉大輔 浜松市議会議員

我々は、日々、連携しましょうと口にしてはいますが、「連携に感謝」との思いは無く、はつとさせられました。やはり議員活動に必要なのは、今日会場の皆さんだけでなく、浜松



市民（地域住民）との連携に感謝することが重要です。皆様、今後

おわりに

新型コロナウイルス第7波の最中に開催された「加藤醫院百周年記念

イベント」は、成功裏に終えることができた。開催7カ月前から企画委員会を立ち上げ、来場者への配慮、緻密な会場準備、もてなし等とともに、徹底した感染対策を講じた。これには多くの方からの助言・提言があつたことは間違いない。

実際、10月初旬は感染者数もコントロールされていたが、今（12月初旬）では実現しなかったかも知れない。

このような大人数のイベントでも感染者が出なかったことは、主催者に勇気と希望を与え、自信に繋がった。今回、開業百年という慶賀を執り行うことができたのは、望外の喜びである。次世代に向けて決意を新たにしたい。

謝辞・29名の各氏からは、心温まる祝電をいただきましたが、紙数の都合上、お名前は割愛しました。会場の感染対策に尽力いただいたザ・浜名湖スタッフ、および百周年記念イベント準備委員会の皆様、ご支援をいただいています。「世論時報」の皆様